ユネスコ無形文化遺産
那智の田楽

熊野那智大社例大祭、日本の三大火祭りに数えられる那智の扇祭りで奉納される那智の田楽。2012年にユネスコの無形文化遺産に登録された。現在は、笛１人、笛控１人、太鼓４人、ビンザサラ４人、シテテン（小鼓）２人の計12名で演じられている。

600年続く舞に込められた田楽復興の物語

例大祭では40分程度だが、2021年11月に熊野那智大社で行われた「高野・熊野夢舞台コンサート」では、20分に短縮して披露された。20歳から保存会に入会し、約50年にわたり活動している小川さんは、息子さんはもちろんお孫さんも所属しているという。最初は〝稚児（ちご）の舞〟から始め、一つ一つの意味を伝えながら、本格的な舞を覚えていく。これこそ文化の伝承である。左／田楽で使われる腰太鼓とビンザサラ。

眩いばかりの明かりに照らされ、人気のない夜の境内に舞台が浮かび上がる。真剣な面持ちで〝那智の田楽〟を練習するのは、那智田楽保存会の男たちだ。

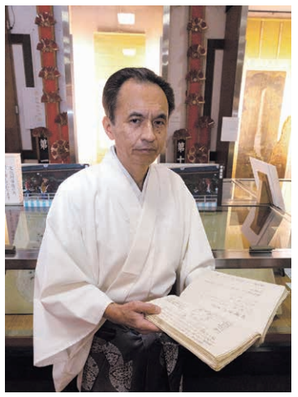
〝那智の田楽は、国の重要無形民俗文化財に登録されている熊野那智大社例大祭の神事で、ユネスコの無形文化遺産にも登録されている。「この田楽は、室町時代から続くもので、洗練されたリズムや雅さがあり、京都から伝わったといわれています。50年もの間、途絶えていたことがあり、2021年に復興、100年を迎えた奇跡の神事なのです」と語るのは、熊野那智大社の男成洋三（おとなりようぞう）宮司。「途絶えた原因は明治元年の神仏分離令で、田楽を演じていた多くの社僧が還俗し、踊り手がいなくなってしまいました」。

途絶えてから約50年後に田楽復興の気運が高まった。そこに偶然にも他所に行っていた田楽笛の名手が帰郷、加えてもう一人の田楽経験者の古老二人による伝授によって復興された。田楽は口伝であったため舞譜や楽譜はなく、復興の際にすべて譜面に書き起こされた。「もちろん600年もの間、全く何も変わっていないとは思えません。田楽を復活できたのは、人々の信仰心のおかげであり、紛れもない奇跡だと思います」と続けた。

「普段は年に一度の例大祭の時だけですが、昨年は何度も舞いました。那智田楽保存会は現在28名です。皆、仕事が終わってからの練習ですから大変だったと思います。田楽は大社の神事ですから、我々住民や氏子たちにとっても大切なものです」と語る保存会副会長の小川一義（おがわかずよし）さん。

舞の所作一つ一つに意味がある。それを説明し、若手に教えることは、歴史や伝統の継承と同じこと。この奇跡の物語自体が、人々による大社への想いが継承されてきた結果に他ならない。

熊野那智大社例大祭で使用される大きな松明。



熊野那智大社宝物殿に展示されている〝田楽要録〟。復活劇を間近に見つめてきた貴重な資料である。

まさしくギリギリの〝奇跡〟の物語

「笛方の名手が帰郷されたことで、奇跡的に復活しました。笛やビンザサラなどの道具や衣装が残っていたことも幸いでした。こうして50年ぶりに〝那智の田楽〟は蘇りましたが、ほどなくしてその笛方の名手は亡くなってしまわれました。昔に奉仕した古老が存命していなかったら、田楽は600年という歴史を刻めなかったことでしょう」と語る男成宮司。

熊野那智大社
住所／東牟婁郡那智勝浦町那智山1
電話／0735-55-0321